

6歳 日常的に絵を描き始める

19歳 浮世絵師・勝川春章に入門

34歳 勝川派を離れる

90歳 死去

vol. 5

葛飾北斎

▶▶ Katsushika Hokusai

「真の絵師」を目指し 進化を止めなかった90年

横山大観・90歳、ピカソ・92歳、熊谷守一・97歳と画家には長寿が少なくないが、平均寿命およそ50歳の時代の90歳となると希少性が際立つ。同時代の人々の2倍近く長生きした葛飾北斎は、与えられし命の時間を一体どのように過ごしたのだろうか。

▶▶ 物心ついた頃に早くも習慣化

生涯に30回も名を変えたと伝えられる北斎は、江戸時代後期にあたる1760年、現在の東京都墨田区に生まれた。御用鏡師だった親戚の家に4歳で養子に出されるも、その家に跡継ぎが生まれて生家に戻る。将来絵師となる片鱗は既に幼少期から見られたようで、6歳の頃には目に映る物を描くことが習慣化していた。

12歳頃になると貸本屋で配達などを手伝ったが、暇を見つけては貸本の挿絵で絵を学んでいたそうだから、絵師になりたいという思いを抱いていたのかもしれない。

当時、江戸の町は色鮮やかな「錦絵」であふれていた。従来の単色刷りの版画と異なり、錦絵は多色刷りの版画であるため、多くの版木が必要となる。北斎は14歳頃から、下絵が書かれた版木を彫る彫師として働き始める。その経験は後に絵師となった際、役立つこととなる。

北斎が人気浮世絵師だった勝川春章に弟子入りしたのは19歳の時。師匠に才能を見出され、わずか1年後には「勝川春朗」の名をもらい、黄表紙や洒落本といった文芸本の挿絵を任された。絵師として第一歩を踏み出したわけだが、それを快く思わない兄弟子たちから妬まれることもあった。だが、北斎は彼らの態度に屈するどころか、むしろ奮起する原動力とし、仕事の技術を高めるべく日々研鑽^{けんさん}に励んだ。



江戸時代の絵師。72歳で刊行した『富嶽三十六景』は斬新な構図と色彩で、西洋の画家たちにも多大な影響を与えた。あらゆる物の絵の描き方を収めた『北斎漫画』は今日のマンガ文化にも通じる。

▶▶▶ 天があと5年生きさせてくれたら

師匠が他界して間もなく、北斎は勝川派を離脱。以来、どの流派にも属さず、独自の道を歩み始める。34歳の時である。そこからは流派の垣根を超えて琳派、狩野派、土佐派などさまざまな技法を学び、さらには西洋絵画の遠近法も身につけた。手掛けた作品も多種多様で、美人画、役者絵、花鳥画、妖怪画、風景画、鳥瞰図、肉筆画とあらゆるジャンルで人々を魅了する絵を描いた。

長きにわたる職業人生の中では、黄表紙や洒落本が幕府により出版規制されたこともあった。厳しい状況におかれても絶え間なく仕事を確保できたのは、多彩なスタイルや圧倒的な技術をもっていただけではないかと想像する。長くその仕事に携わっていても、才能に恵まれていても、慢心せず、腕を磨き続ける。新しい技術も積極的に採り入れる。それは簡単なようで難しい。

北斎の飽くなき探求心は年齢を重ねても衰えを知らず、70歳を過ぎて接骨医にも教を乞うている。理由は人体を描くために、骨格と筋肉を正しく理解したかったから。

絵師として偉業を成し遂げた北斎も家計管理は無頓着だったようで、売れっ子でありながら借金取りに追われたこともある。1カ所に留まることも苦手で、引っ越しは90回以上。2度の結婚でもうけた6人の子供のうち娘1人が同じ絵師となり、身の回りの世話をした。人づき合いが得意でないにもかかわらず、多くの門人たちから慕われ、支えられた。1849年4月9日、90歳で他界。「天があと5年生きさせてくれたら、真の絵師になれるのに」——死の間際まで情熱の炎を燃やし続け、歩みを止めず、進化し続けた生涯だった。

(執筆/ライター 篠田りょうこ)